〔個別研究〕

子どもの気質に関する研究（2）
── 母親がとらえた新生児の行動特徴の検討 ──

調査研究企画部　庄司順一
都立母子保健院　副田敦裕
東京家政大学　岩崎亜美
東京慈恵会医科大学　前川喜平

子どもの気質と新生児の行動特徴との関連、あるいは気質特徴の起源についての基礎的な検討を行うために、筆者らは「新生児用行動様式質問紙」（通称「赤ちゃんアンケート」）を作成し、検討を行った。この質問紙は母親が回答するもので、37項目からなり、食事、排泄、睡眠等、具体的な行動について、2～4段階で評価するようになっている。これらは、数日間の児とのかかわりの中で、比較的容易に観察しうると思われる行動にもとづいている。対象は117名の新生児であり、産科退院前の生後6日に、この質問紙を母親に配布し、回収した。その結果、反応の強さ、周期性、頻度等に個人差が認められ、新生児の行動特徴を知るうえで有効であることが示唆された。この質問紙は、あくまでも母親が知覚した新生児の行動特徴ではあるが、今後縦断的にデータを得ることにより、気質特徴の発達について検討を加えたい。

見出し語：気質、新生児、行動特徴、母親の知覚、質問紙

A Study on Temperament of Child (2): Mother's Perception of Behavioral Characteristics of Her Newborn Baby

Junichi SHOJI, Atsuhiro SOEDA, Tsugumi IWASAKI, Kihei MAEKAWA

To understand the origin and development of temperamental characteristics of child, we have to know its relations to newborn behavioral characteristics. The purpose of this study was to clarify behavioral characteristics of the newborn babies. The authors developped a questionnaire for mothers. The questionnaire consisted of 37 items, such as behaviors, activities, or rhythmicities during feeding, excretion, crying, sleep-wake cycles, which were easily observed in several days care by mothers. Data were obtained for 117 newborns, 6 day-old, on the questionnaire. The results showed individual differences in behavioral characteristics, which suggested usefulness of the questionnaire for understanding mother's perception of behavioral characteristics of her baby.

Key words: Temperament, Newborn, Behavioral characteristics, Questionnaire, Mother's perception

Ⅰ　研究目的

子どもの気質に関する研究は、ThomasとChessらのニューヨーク縦断的研究（ＮＹＬＳ）の枠組み(Thomas and Chess, 1977)でなされることが多い。しかし、ＮＹＬＳでは、研究が開始されたのは子どもが生後３カ月頃からであった。しかし、この時期までにはすでに親との多くのかかわりを経験しており、子どもにみられた特徴が生得的なものか、親とのかかわりで形成されてきたものかは明らかにできない。

それではいつ頃から気質特徴は認められるのであろうか。気質特徴の起源はどのように考えたらよいのであろうか。Brazelton(1969)は「どの新生児も個性的である」と述べている。Thomas自身、新生児期から研究を開始することはできなかったが、そうした研究の必要性は認めている（私信）。

新生児の行動特徴をとらえる方法としてよく知られているのがブラゼルトンの新生児行動評価法（ＮＢＡＳ）である(Brazelton, 1973)。これは、アメリカにおいては新生児研究の不可欠な手段として広く用いられているが、わが国では十分普及してはいない。アメリカでは、ブラゼルトン法を母親が実施できるよう修正したり、その質問紙法も工夫されている(Field, Dempsey, Hallock, et al., 1978)。他方、ＮＹＬＳにもとづく４～７カ月児用の気質質問紙（ＩＴＱ）を生後２週の児に適用する試みもなされている(Sostek and Anders, 1977)。このように、新生児にみられる行動特徴と後の気質との関連、あるいは気質特徴の起源は興味深いテーマといえる。

筆者らは、ＮＹＬＳにもとづく質問紙の標準化の研究をすすめてきている（庄司・前川, 1981: 副田・横井・庄司, 1984: 横井・副田・庄司, 1985: 庄司・副田・恒次・前川, 1995）。それらにおいては、Careyの乳児気質質問紙改訂版（Ｒ－ＩＴＱ）の検討とともに、筆者らが独自に作成した１～２か月児用の質問紙も含まれていた。しかし、筆者らも、新生児を対象とした研究の必要性を認めつつも、これまで実現することはできなかった。そこで、本研究においては、気質特徴の発達を考える基礎的資料を得るために、母親が知覚した新生児の行動特徴を検討することにした。ただ、新生児期には、ＮＹＬＳの気質概念を適用するのは困難であるとも考えられるため、新生児の行動を具体的に検討することにして、ＮＹＬＳの９カテゴリにはこだわらないことにした。

Ⅱ　研究方法

1)質問紙の作成：新生児用行動様式質問紙、通称「赤ちゃんアンケート」）という新生児を対象にした質問紙（表１を参照のこと）を作成した。項目は、食事、排泄、睡眠等、具体的な行動について、２～４段階で評価するものであり、37項目からなる。これは、母親が回答するもので、数日間の児とのかかわりの中で、比較的容易に観察しうると思われる具体的な行動にもとづくものである。

2)対象および方法：都立母子保健院産科で出産した児117名を対象とした。いずれも、とくに異常を認めない成熟新生児であった。退院前日の生後６日に母親に質問紙を配布し、記入を依頼した。

Ⅲ　結　　果

主な結果は表１に示した。ここでは各項目への回答の頻度（％）を示してある。ただし、「記入なし」の頻度は記載していない。「記入なし」は、項目33(15.4％)、項目21(6.8％)、項目36(6.0％)を除き、５％以下であり、結果の検討には支障がないと考える。また、項目、行動の表現も一部修正してある。

項目１～12は授乳、項目13～15は排泄、項目16～22は泣き、項目23～31は睡眠と覚醒、項目32～36は視覚、聴覚や抱かれたときの反応などについてである。

項目18および29はそれぞれ「今までで一番長く泣き続けた時間の長さ」「今までで一番長く泣かずに目覚めていた時間の長さ」をたずねている項目であり、表１には結果は示されていない。時間の長さに関する項目は項目２にも含まれている

１回の授乳に要する時間(項目２)は、「だいたい決まっている」のが多く(80.3％)、「そのときどきでずいぶんちがう」のは18.8％であった。だいたい決まっているとした場合にも、所要時間には大きな個人差が認められた。すなわち、10～14分6.4％、15～19分17.0％、20～29分38.3％、30～39分18.1％、40～49分11.7％、60分以上5.3％、記入なし3.2％であった。

今までで一番長く泣き続けていた（項目18）の

表1　新生児の行動

項　目	行動とその頻度（%）
1)母乳を与える時間間隔	aだいたい決まっている(54.7)　bそのときどきでずいぶんちがう(43.6)
2)1回の授乳に要する時間	aだいたい決まっている(80.3)　bそのときどきでずいぶんちがう(18.8)
3)授乳への慣れ	a母子ともに上手(49.6) b母親は上手だと思うが、子どもは慣れていない(11.1) c母子ともに慣れていない(37.6)
4)吸啜	aしっかり吸いつく(87.2)　b吸いつき方はおとなしい(9.4)
5)授乳途中の眠り	aいつも眠ってしまう(40.2)　bときどき眠ってしまう(55.5) cいつもおきている(4.3)
6)授乳中に乳首が口からはずれたときの行動	aそのままおとなしくしている(9.4) bおとなしくしているときと、乳首をさがしたり泣き出すときがある(51.3) cたいてい泣かずに、乳首をさがす(29.9)　dたいてい泣き出す(6.8)
7)授乳中の手足の動き	aたいていよく動かす(12.0)　bたいてあまり動かさない(88.0)
8)おなかがいっぱいになったときの行動	a乳首を舌で押し出したり、顔をそむける(34.2) bはっきり行動では示さない(11.1)　c眠っていることが多い(50.4)
9)空腹時に抱くと	aたいてい乳首をさがすように顔を左右に動かす(85.5) bときどき乳首をさがすように顔を左右に動かす(7.7) cあまりそういうことはしない(6.0)
10)おなかがすくと	a泣いて教える(81.2) b泣くことは少なく、口を開けたり、ソデをしゃぶったりする(13.7) cいつもおとなしくしているので、わかりにくい(0.9)
11)空腹で泣いていても、	aたいてい1分くらい泣き止む(30.8) b抱いたり、あやすとときどき1分くらい泣き止む(20.5) cときどき30秒くらい泣き止む(19.7) d乳を与えるまで泣き続ける(28.2)
12)吐くこと	aしばしばゲボッと大量に吐く(3.4) b大量に吐くことはないが、ダラダラと少量を吐く(29.9) cほとんどない(65.0)
13)1日の排便の回数	aたいてい決まっている(66.7)　b日によってずいぶんちがう(31.6)
14)オムツが濡れたとき	aたいてい泣く(45.3)　bほとんど泣かない(23.1)　cまだ分からない(30.8)
15)オムツ替えのときの体動	aいつもよく足を動かす(78.6)　bときどき足を動かす(20.5) cあまり動かさない(0.9)
16)あなたの赤ちゃんは	aよく泣く(19.7)　bふつう(55.6) cあまり泣かない(22.2)　dほとんど泣かない(2.6)
17)泣き声の大きさ	aいつも元気な声で泣く(77.8)　bときどき元気な声で泣く(19.7) cたいてい弱々しい声で泣く(2.6)
19)激しく泣くこと	aたいてい激しく泣く(13.7)　bときどき激しく泣く(38.5) c元気な声で泣くが激しいというほどではない(42.7) dあまり大きな声で泣くことはない(4.3)
20)泣いているときの体動	aよく手足を動かしている(77.8)　b手足をぎゅっとかたくして泣く(17.1) c泣いているとき手足に力をいれたり、動かしたりしない(4.3)

項　　目	行動とその頻度（%）
21)泣いているときの自己鎮静力	a自分で泣き止むことはできない(23.1) b泣き止もうとするがうまくいかない(25.6) c短時間なら泣き止むことがある(41.0) d自分の力でときどきかなり長く泣き止む(3.4)
22)激しく泣いているとき	aどうしても鎮められない(1.7)　b乳首をくわえさせれば泣き止む(50.4) c抱いて身体をゆすると泣き止む(36.8) d抱いて話しかけると泣き止む(7.7)
23)睡眠－覚醒のリズム	aだいたい決まっている(47.9) b昼と夜とでちがうが、昼・夜それぞれではだいたい決まっている(23.9) cそのときどきでちがう(28.2)
24)眠りの深さ	a眠りが浅く、目を覚ましやすい(1.7) b眠っているときはぐっすりと眠る(81.2)　cどちらともいえない(13.7)
25)睡眠中の物音への反応	aしばしば目を覚ます(0.0)　bときどき目を覚ます(46.2) cぐっすり眠っている(53.0)
26)睡眠中の体動	aよく手足を動かす(14.5)　bおとなしく、じっと眠っている(81.2)
27)睡眠中の驚愕反応	aよくある(20.5)　bときどきある(69.2)　c全然ない(10.3)
28)睡眠中の自発的微笑	aよくある(41.0)　bときどきある(58.1)　c全然ない(0.9)
30)覚醒時の体動	aしょっちゅう手足を動かしたり、身体をよじったりしている(12.0) b動かしているときと、おとなしくしているときがある(71.8) cあまり動かさず、おとなしくしていることが多い(15.4)
31)覚醒時の手の開き	a手を開いていることが多い(25.6)　b手を閉じていることが多い(27.4) c手を開いたり、閉じたりしていることが多い(43.6)
32)手しゃぶり	a自分の手を口にもっていくのをみたことはない(19.7) b自分の手をときどき口にふれる(56.4) c自分の手や指をときどき口の中にいれる(12.8) d自分の手や指をときどき口の中にいれて吸う(9.4)
33)顔をふいたときの反応	aたいていいやがって、顔を動かしたり、泣き出したりする(13.7) bたいていいやがるが、泣いたりはせず、顔をしかめるくらいである(57.3) c気持ちよさそうにしている(13.7)
34)抱いてゆすったときの反応	a手足をふり動かしたり、もがいたりする(1.7) b多少もがくが、しばらくすると落ち着く(29.9) c抱くとすぐ腕の中におさまり、くつろぐ(64.1) d顔を母親の方に向け、手をのばして母親の服をつかむ(3.4)
35)まぶしい光への反応	aおどろいてビクッとする(9.4)　b顔をしかめる(81.2) cとくに変化はない(6.0)
36)大きな音への反応	aおどろいてビクッとする(60.7)　b泣き出す(0.0) c顔をしかめる(23.9)　dとくに変化はない(9.4)
37)赤ちゃんの印象	a眠っていることが多い(71.8) bほとんど目覚めていて、静かにしている(1.7) cときどき泣くが、静かになりやすい(17.9) dよく泣き、なかなか静かにならない(6.0)

は、記入なしが38.5%と多かったが、これを除くと、1～4分23.6%、5～9分25%、10～14分19.4%、15～19分6.9%、20～29分9.7%、30～39分8.3%、40分以上6.9%であった。

今までで泣かずに一番長く目覚めていた時間（項目29）は、全体の52名(47.7%)が記入なしあるいは不明となっていたが、これを除いて頻度を求めると、1～9分1.5%、10～19分4.6%、20～29分10.8%、30～39分32.3%、40～59分3.1%、60分以上47.7%であった。

時間の長さに関しては、このように大きな個人差が認められたが、同様に、表1に示した各行動についても、頻度や強さに個人差が認められた。

Ⅳ 考　察

新生児の行動特徴を明らかにするために質問紙を作成し、生後6日の児の母親に回答を依頼した。従来の気質研究では、新生児期を対象としたものがほとんどないこと、新生児期との関係において後の発達をみていきたいと考えたからである。得られた結果は、母親が観察した児の状態であり、したがって、新生児の客観的な行動特徴をとらえているとはいえない。

ここに示した結果は、これまでほとんど検討されたことのない領域についての資料といえ、興味深いものといえよう。従来の児童心理学の教科書や育児書には、例えば睡眠時間など、平均的、一般的な記述がなされているにすぎず、個人差を十分考慮していない。本研究の結果は、少なくとも母親がとらえた限りにおいてであるが、子どもの行動特徴には個人差が顕著にみられることを示唆している。

今回取り上げた項目には、子ども自身の特徴というよりも、母親の子どもへの慣れを含んでいるものもある。母親の育児の仕方が子どもにも影響することはいうまでもないことであり、今後、母親の属性等との関係を分析したい。

ここに示された行動特徴が、後に明確になる気質特徴とどのような関連を有するのかは、同じ児を縦断的にみていくことにより明らかにされるものである。

文　献

Brazelton, T. B.: Infants and mothers. Hutchinson, 1969

Brazelton, T. B.: Neonatal Behavioral Assessment Scale. Clinics in Developmental Medicine, No. 50, 1973

Field, T. M., Dempsey, J. R., Hallock, N. H., et al.: The mother's assessment of the behavior of her infant. Infant Behavior and Development, 1: 156-167, 1978

庄司順一・前川喜平：乳児の気質－その意義と評価法－. 小児科診療, 44(8): 1225-1232, 1981

庄司順一・副田敦裕・恒次欽也・前川喜平：子どもの気質に関する研究（1）－乳児気質質問紙（R－ＩＴＱ日本語版）の因子分析による検討－. 日本総合愛育研究所紀要, 31: 163-168, 1995

副田敦裕・横井茂夫・庄司順一：乳児の気質と発達に関する研究－1～2カ月児について－. 東京慈恵会医科大学雑誌, 99: 709-715, 717-723, 1984

Sostek, A. M. and Anders, T. F.: Relationships among the Brazelton Neonatal Scale, Bayley Infant Scales, and early temperament. Child Development, 48: 320-323, 1977

Thomas, A. and Chess, S.: Temperament and development. N. Y.: Brunner/Mazel, 1977

横井茂夫・副田敦裕・庄司順一：乳児の気質に関する研究－. 東京慈恵会医科大学雑誌, 100: 871-877, 879-885, 1985